

令和元年6月18日現在

機関番号：11601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03831

研究課題名(和文) <原発被災地>における多文化的実践に関する研究調査

研究課題名(英文) Multicultural practices in the radioactive area

研究代表者

川端 浩平 (KAWABATA, Kohei)

福島大学・行政政策学類・准教授

研究者番号：80563965

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、東日本大震災以降の福島における放射能汚染をめぐる不安といった困難な状況やリスクに向き合うなかで、「非集住的環境」において生活する在日コリアンが、いかに日常生活や身近な人間関係を通じて多文化的実践を遂行しているのかを明らかにした。具体的には、郡山市、福島市、いわき市、会津若松市などで生活する福島の朝鮮学校出身者およびその家族によって形成されている朝鮮学校コミュニティへの参与観察および聞き取り調査を継続して実施した。研究期間全体を通じては、在日コリアンと日本人によって構成される家族における震災や放射能汚染という困難に対応する中で多文化的実践を営んでいることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまであまり焦点が当てられることのなかった、在日コリアンと日本人の通婚によって形成された多文化家族による日常実践の領域を明らかにした。とりわけ、震災と放射能汚染という困難に対して、様々な困難や葛藤を抱えながらも、福島の朝鮮学校を中心としたエスニック・コミュニティにおいては、一枚岩の民族的アイデンティティに囚われることのない多様なアイデンティティのあり方がみとめられるとともに、相互扶助的な実践が営まれていることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This research attempted to illuminate everyday multicultural practices of Zainichi Koreans in Fukushima prefecture living under individualized conditions amid facing risks and difficulties due to the radioactive contamination after the great earthquake in 2011. In particular, it focused on Zainichi Korean networks based on the Korean ethnic school in Fukushima, and engaged in the participant observation and interviews in Koriyama-shi, Fukushima-shi, and Iwaki-shi. Overall, this study clarified the everyday multicultural practices by the multicultural families consisted of Zainichi Koreans and Japanese amid the difficult situations caused by the disasters and nuclear accidents.

研究分野：社会学

キーワード：排除・差別

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究で主題としているフィールド調査を通じた在日コリアンの帰属意識の形成や差別の問題に関する事例研究は、これまで多数の研究者がとりくんできている。そして現在もなお、在日コリアンの生活スタイルとホスト社会の変容にともない改めて問われるべき再帰的な問題として重要である。既存の研究が明らかにしてきたのは、帰属意識は均質的なものや民族性の喪失としてではなく、多様化もしくは混淆化しているということである(福岡安則 1993、金泰泳 1999)。また、申請者は多数の在日コリアンの若い世代が家族や親戚以外の知り合いがいないという「非集住的環境」で帰属意識を形成していることを明らかにしてきた。

さらに、1980年代には日本人と結婚している在日コリアンが多数派となっていることが明らかとなっており、特に1985年の国籍法の改正に伴いそのあいだに生まれた大多数の子供たちが日本国籍を取得している。このような在日コリアン社会を取り巻く大きな変化を背景に、彼/彼女らの民族的な均質性を前提としたアイデンティティ政治に対して、日本人と在日コリアンのあいだに生れたいわゆる「ダブル」や日本国籍取得者たちの帰属意識に関する研究もみられる(倉石一郎 2000、李洪章 2009)。これらの研究調査は、混淆的な帰属意識の生成とともにホスト社会の混淆性を示しているものである。

しかしまた、申請者が実施した在日コリアンの「ダブル」の若者の帰属意識をめぐる研究調査から窺えることは、彼/彼女らの帰属意識は日本人の家族・親族や地域社会といった身近な世界における日常的実践を通じて形成されるものである。つまり、日常という生活空間で生じる日々の出来事や困難な状況において共に向き合うことを通じてエスニシティはより重層的になっていくのであり、差別や排除に対抗するような共生のための多文化的実践が編み出されていくのである。ただしそのような在日コリアンと日本人の家族による多文化的実践に関してはこれまで明らかにされてこなかった。これらの不可視化される多文化的実践の領域に関する研究調査を進めていくうえで、日本国籍の取得や通婚の進展によって統計等を通じた量的な把握が困難であるがゆえに、参与観察や聞き取り調査といった質的なアプローチによって明らかにすることには大きな意義がある。

ゆえに本研究では、福島およびその周辺地域へ避難した在日コリアンと日本人の家族に対して参与観察および聞き取り調査を実施し、彼/彼女らの多文化的実践の領域を明らかにすることを試みる。具体的には、放射能汚染の問題を中心としたポスト震災後に生じたりリスクに向き合わざるを得ない福島の日常生活において、いかに在日コリアンと日本人の家族や関係者が日々の課題や不安を乗り越えていこうと試みているのかに焦点を当てる。なぜならば、災害や危機的状況においてマイノリティの問題はより深刻化するものであり、苦難と向き合うための共に生きるスキルが必要とされるからである。このような分析視角を担保することによって、これまでほとんど無視されてきた東日本大震災後の外国人住民をとりまく諸課題を明らかにするとともに、多文化化する地域社会における共生のあり方を提示することが可能となる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、東日本大震災以降の福島における放射能汚染をめぐる不安といった困難な状況やリスクに向き合うなかで、「非集住的環境」で生活する在日コリアンが、いかに日常生活や身近な人間関係を通じて共生の実践=多文化的実践を遂行しているのかを明らかにすることである。具体的には、郡山市、福島市、いわき市などの福島県の主要都市および、他所へ避難した在日コリアンたちの参与観察および聞き取り調査を実施した。とりわけ、日本人と結婚した在日コリアンおよび「ダブル」の子どもたち、またその家族・親族や地域社会における関係性とそれに伴う帰属意識の混淆性に焦点を当てることにより、既存の研究では不可視化されてきた多文化的実践を通じた共生のあり方を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

福島市、郡山市、いわき市とその他の福島県諸地域および、他所へ避難した在日コリアンと彼/彼女らの家族(日本人配偶者や「ダブル」の子供たちを含む)の参与観察および聞き取り調査を実施した。調査方法は個人への聞き取り調査と対象者の日常生活(職場・学校・余暇など)への参与観察および日本人配偶者と「ダブル」の子供たちに対する聞き取り調査である。また、特定の対象者に対して複数回の追加調査やインタビュー調査を実施することにより、聞き取り調査で得られた質的データの考察・分析を研ぎ澄ますことを試みた。その際には、電子メール、SNS、スカイプ等のデジタルデバイスも利用することにより、より精緻な質的データを蓄積および解析する研究体制を整えた。本研究の成果は、(1)著書および学術論文(日本語および英語)、(2)国内外の学会および研究会での発表、(3)行政・大学・民族組織等との連携によって開催するワークショップ等での報告による地域社会への研究成果の還元、(4)最終成果報告書によって示された。これまで中国地方、関西地方、関東地方で生活する在日コリアンに関する10年以上に及ぶフィールド調査を通じて構築してきたネットワークと経験を活かし、効率的に研究を進めるために研究環境の整備を進めるとともに、地域社会をフィールドとした多文化間における共生の実践の領域に関する研究体制とネットワークを構築することを目指した。

4. 研究成果

本研究は、2011年3月に起きた東日本大震災以降の福島における放射能汚染をめぐる不安と

いった困難な状況やリスクに向き合うなかで、在日コリアンのみが共に生活していた集住的環境であった従来のエスニック共同体ではなく、郊外などの「非集住的環境」において生活する在日コリアンと日本人配偶者および「ダブル」の子供たちが、いかに日常生活や身近な人間関係を通じて共生の実践=多文化的実践を遂行しているのかを明らかにした。具体的には、郡山市、福島市、いわき市などの福島県の主要都市および、他所へ避難した在日コリアンたちの参与観察および聞き取り調査を試みた。とりわけ、日本人と結婚した在日コリアンおよび「ダブル」の子どもたち、またその家族・親族や地域社会における関係性とそれに伴う帰属意識の混濁性に焦点を当てることにより、既存の研究において不可視化されてきた多文化的実践を通じた共生のあり方を明らかにすることを目的とした。最終年度においては、福島朝鮮学校出身者およびその家族によって形成されている朝鮮学校コミュニティへの参与観察および聞き取り調査を継続して実施するとともに、その成果を日本語および英語の編著本二冊にまとめることにより国内外へと発信した。研究期間全体を通じては、在日コリアンと日本人によって構成される家族における震災や放射能汚染という困難に対応する中で、相互扶助的な多文化的実践を営んでいることが明らかになった。とりわけ本研究においては、在日コリアンを取り巻く環境をめぐる震災以前と震災以降の断絶のみを強調するのではなく、植民地主義・高度経済成長・ポスト高度経済成長といった歴史社会的背景を踏まえた連続性の中で彼/彼女らの実践や課題、アイデンティティの問題を検討することが必要であることが明らかとなった。また、「ダブル」の子供たちの調査から、彼/彼女らは、朝鮮学校コミュニティによって育まれた文化的基盤の恩恵を受けつつも、血縁をベースとした民族概念のみに依拠するのではなく、混濁化したアイデンティティを育てており、共同体の側もそのような混濁性を引き受けつつコミュニティを維持していることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

川端浩平, 「<身近な世界>のフィールドワークから社会問題を学びなおす」, 『現代の社会病理』, No.33, 2018, 65-82 (招待あり, 査読なし)

川端浩平, 「帰化と放射能汚染」, 『at プラス』, 28号, 2016, 92-111 (査読なし)

〔学会発表〕(計1件)

川端浩平, 「<身近な世界>のフィールドワークから考える社会問題」日本社会病理学会第33回大会シンポジウム(國學院大學)2017年9月2日(招待あり)

〔図書〕(計12件)

Shiobara, Yoshikazu, Kawabata, Kohei, and Joel Mathew, *Bridging Social Division: Cultural and Social Exclusionism in Contemporary Japan*, Routledge, 2019 (forthcoming).

川端浩平・安藤丈将, 『サイレント・マジョリティとは誰か フィールドから学ぶ地域社会学』, ナカニシヤ出版, 2018, 42

田中東子・山本敦久・安藤丈将, 『出来事から学ぶカルチュラル・スタディーズ』川端浩平, (「ヤンキー文化、郊外、排除と包摂 ハマータウンの野郎どもはどこへ行ったのか」), ナカニシヤ出版, 2017, 16

白石壮一郎・椎野若菜, 『フィールドから考える「社会問題」』川端浩平, (「在日コリアンとの「再会」 ジモトのフィールドワークから見えてきたもの」), 古今書院, 2017, 14

山泰幸, 『在日コリアンの離散と生の諸相 表象とアイデンティティの間隙を縫って』川端浩平, (「ルーツと越境の現在 グローバル都市ソウルで生活する在日コリアンの語りから」), 明石書店, 2017, 22

塩原良和・稲津秀樹, 『社会的分断を越境する 他者と出会いなおす想像力』川端浩平, (「反知性主義、未決性、互酬性から希望へ ヘイトスピーチでの「分断」から考える」), 青弓社, 2017, 20

鳥越皓之・金子勇, 『現場から創る社会学理論』川端浩平, (「身近な世界のエスノグラフィ」), ミネルヴァ書房, 2017, 11

秋津元輝・渡邊拓也, 『せめぎ合う親密と公共 中間圏というアリーナ』川端浩平, (「地域社会のグレーゾーン ホームレスから地元志向現象を考える」), 京都大学学術出版会, 2017, 24

谷口幹也, 『アートする力を語る 越境する想像力、転換期の美術教育』川端浩平, (「ネズミ色の領域を/で考える 排外主義とコンピューター化時代における想像力の行方」), 中川書店, 2017, 18

Iwabuchi, Koichi, eds., *Multiculturalism in East Asia: Transnational Exploration of Japan, South Korea, and Taiwan*, Kawabata, Kohei, ("Living in love and hate: Transforming representations and identities of Zainichi Koreans in contemporary Japan"), Rowman and Littlefield, 2016, 13

好井裕明, 『排除と差別の社会学』川端浩平, (「「当事者」は差別や排除を語るのか? <ジモト>の在日コリアンとともに感じたこと」), 有斐閣, 2016, 20

河合優子, 『交錯する多文化社会』川端浩平, (「<共に生きる領域>における多文化的実践 在日コリアンの「若者」の追跡調査から」), ナカニシヤ出版, 2016, 27

〔産業財産権〕
出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：金泰植
ローマ字氏名：Kim Taesik

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。